

17世紀初頭、オランダ東インド会社の中国陶磁貿易

羅, 艶姣
九州大学 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1929740>

出版情報 : 九州大学東洋史論集. 45, pp.1-18, 2018-03-29. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン :
権利関係 :

17世紀初頭、オランダ東インド会社の 中国陶磁貿易

羅 艶 姣

17世紀前半、東・東南アジア海域における交易拡大とともに、中国陶磁の貿易も活発化していった。1560年代末に海禁が緩和され、福建南部の海澄港から東南アジア各地への渡航が解禁されると、華人海商、特に福建南部の閩南海商は海澄港を拠点として東南アジア全域に交易圏を拡大し、生糸・絹や綿布などとともに大量の中国陶磁も輸出した。さらにマカオを拠点とするポルトガル人、マニラを拠点とするスペイン人も中国貿易の貿易に参入し、マカオやマニラに輸入された中国陶磁を、ヨーロッパ・アメリカ、及びアジア各地に供給していた。さらに17世紀初頭には、日本の朱印船や、オランダ東インド会社も、東・東南アジア海域における中国陶磁の貿易に参入しはじめた。やがてオランダ人は、1624年には台湾中西部の^{タイワン}大員を占拠し、東アジア海域における貿易拠点とした。

従来、17世紀前半のオランダ東インド会社における中国陶磁貿易については、文献史料と考古資料の両面から研究が進められてきた。特に1630～1650年代の陶磁貿易に関しては、現存する文献史料や考古資料が多いことから、すでに多くの研究成果が蓄積されている。これに対し、それに先だつ1600～1630年代におけるオランダ東インド会社の陶磁貿易に関する実証研究は限られている。17世紀におけるオランダ東インド会社の陶磁貿易については、T・フォルカー (T. Volker) がオランダ東インド会社の1602～1682年の80年間にわたる文書史料から陶磁貿易に関する記録を抜粋・英訳し、*Porcelain and The Dutch East Indian Company* として刊行している⁽¹⁾。同書には17世紀初頭におけるオランダ東インド会社の陶磁貿易に関する記事も収録されているが、従来の研究では十分に利用されていない。

また近年では台湾において、台湾のオランダ東インド会社商館に関する原史料などが次々と中国語訳されており、そのなかには陶磁貿易に関する記事も少なくない。さらに台湾では、17世紀の陶磁器に対する考古学的調

査も進みつつあり、その成果に基づく総合的な研究も発表されている。筆者はオランダ語を解さないため、東インド会社の原文書を利用することはできないが、これらの英訳・中国語訳史料、および日本語訳史料を活用し、さらに考古学的調査の成果も参照することによって、従来の研究では十分に解明されていない、オランダ東インド会社が^{タイオワン}大員に貿易拠点を確立するに先だつ、1600～1630年代における中国陶磁貿易の実態について、再検討を試みることにしたい。

一、17世紀前期における東・東南アジア海域の陶磁貿易

1560年代末に明朝が海禁を緩和し、福建海澄港から東南アジアへの渡航を解禁すると、福建海商はフィリピン方面に向かう「東洋」航路、インドシナ半島やスマトラ・ジャワ方面に向かう「西洋」航路に進出し、マニラ・バンテン・パタニなどの新興港市には、多くの華人が居留し唐人町が形成されていった⁽²⁾。このような海上貿易の拡大とともに、中国陶磁の東南アジアへの輸出も急拡大していく。

一方、ポルトガル人は1557（嘉靖三十六）年にマカオに貿易拠点を確立し、マカオを経由して日本やヨーロッパに中国陶磁器を輸出していた⁽³⁾。また1570年代には、スペイン人はフィリピンのマニラとメキシコのアカブルコを結ぶ、マニラ・ガレオン貿易を開始し、これによって大量の中国陶磁がマニラを経由してメキシコへ、さらにメキシコからスペインへと運ばれていった⁽⁴⁾。こうして16世紀末の東・東南アジア海域では、華人海商を中心に、ポルトガル人やスペイン人も加わって、中国陶磁の交易ネットワークが形成されていく。

さらに17世紀に入ると、オランダ東インド会社が海域アジア貿易に参入し、バンテン・パタニ・平戸などに商館を設立して、陶磁貿易にも乗り出しはじめる。1620年代には、オランダ人は東南アジア海域から東アジア海域に交易圏を拡大することを目指し、1622（天啓二）年には澎湖を占拠して貿易拠点としようとする。しかし澎湖占拠は明朝との対立もあって失敗に終わり、その後は台湾の大員に新たな拠点を構築することを図った。こうした状況下で、オランダ人は華人海商をはじめ、ポルトガル人やスペイン人、および日本の朱印船などと競合しつつ、どのように陶磁貿易を展開

しようとしたのだろうか。最近では、17世紀前期のオランダ東インド会社の陶磁貿易についても、いくつかの注目すべき研究成果が発表されている。このため本節では、まずこの問題に関する先行研究を、中国・台湾における成果を中心に整理・紹介し、それらに基づいて17世紀前期のオランダの中国陶磁貿易に関する、主要な研究成果を紹介しておきたい。

まずM・ブルドレーは、ヨーロッパ諸国の東インド会社による、17～18世紀の陶磁貿易を概観し、オランダ東インド会社のアジア市場に進出し、台湾を拠点として陶磁貿易を行った過程を略述したが、陶磁器の輸出入量や貿易ルートに対する具体的な検討は行っていない⁽⁶⁾。その後、上述のように、T・フォルカーはオランダ東インド会社の往復書簡・商館日誌などから、1602（万暦三十）年から1682（康熙二十一）年にいたる80年間の史料に記載された陶磁貿易関係記事を抜粋・英訳した史料集を刊行した⁽⁶⁾。中国語圏においてその成果を活用した最初期の研究として、17～18世紀のオランダによる陶磁貿易の動向を通観した、銭江の論考を挙げることができる⁽⁷⁾。さらに最近では、台湾において『巴達維亜城日記』⁽⁸⁾・『熱蘭遮城日記』⁽⁹⁾などのオランダ東インド会社に関する基本史料の中国語訳が刊行され、中国語圏においては、これらの史料に記録された中国陶磁の輸出入量の分析も進められている。

一方、オランダが1624（天啓四）年に大員を占拠し、ゼーランディア城を築いて拠点とする以前の、オランダ東インド会社の中国貿易については、1622～1624年に行われた、澎湖諸島における貿易活動について検討が行われてきた。欧米や台湾の研究者は、オランダによる澎湖占領の経過を詳論し⁽¹⁰⁾、中国大陸の研究者も、澎湖・台湾の主権問題に関連してその過程を論じている⁽¹¹⁾。ただしオランダと明朝との交渉の経過や争点などに関する具体的な検討はなお不十分である⁽¹²⁾。

これに対し、林偉盛はオランダの艦隊の司令官として澎湖占領を指揮したコルネリス・レイエルセン（Cornelis Reijersz）の日記を主要史料として、オランダ人の澎湖占拠から台湾進出にいたる過程を分析するとともに、その過程で華人商人と行った交易の実態についても検討した。それによれば、オランダ人の澎湖占拠期には、略奪行為のほかに、福建の官吏や商人から少量の商品を密輸したり、大員に赴いて華人海商から少量の低質生糸を購入することもあったが、ほとんど利益を得ることはなく、明朝の海禁強化にともない、これらの貿易さえ途絶してしまったという⁽¹³⁾。ただし林偉盛

はこの時期に行われた陶磁貿易については論及しておらず、その実態はなお不明確である。

この時期の陶磁貿易に関して、文献史料による研究を補完するものが、考古学的な発掘調査の成果である。17世紀初頭の東・東南アジア海域における陶磁貿易については、バンテン、平戸、台湾などの遺跡において発掘調査が進められ、重要な実物資料を提供している⁽¹⁴⁾。特に盧泰康は、これらの考古資料とオランダ・中国史料を併用して、17世紀の台湾を中心とした陶磁器の中継貿易について詳細な検討を加えている⁽¹⁵⁾。

澎湖諸島における出土陶磁については、従来は宋元陶磁を中心に研究が進められ、明末清初の陶磁器に関する研究は乏しかった。これに対し、盧泰康はオランダが澎湖占拠時期に城堡を築いた風櫃尾遺跡から出土した多量の陶磁器を精査し、それらの種類・生産地・年代を判定した⁽¹⁶⁾。その結果、風櫃尾遺跡出土の中国陶磁は大部分が1622～1634年のものであり、福建漳州窯の陶磁器が多数を占めることが判明した。そのうえで盧泰康は、『巴達維亞城日誌』やオランダ東インド会社の報告書を参照して、オランダ人は澎湖占拠時期に中国陶磁を大量に購入したが、それらの多くは粗製の漳州窯陶磁であり、オランダ人は安定した陶磁器の供給源を確保できず、商品の品質の選択権も持っていなかったと指摘している。また盧泰康は風櫃尾遺跡出土陶磁の供給源について、オランダ人による福建沿海での略奪と、大員における華人海商との密貿易だと述べているが、具体的な論拠は示していない⁽¹⁷⁾。

またオランダ人の台湾進出後の陶磁貿易についても、盧泰康は主に『熱蘭遮城日誌』に基づき、1624～1661年に大員に輸入された中国陶磁の数量を分析し、この期間の陶磁貿易を激動期（1624～1632）と大規模展開期（1633～1661）に区分し、大員から輸出された陶磁器の数量が1634（崇禎七）年から急増したことを示した。またオランダ人は大員に來航した華人海商が舶載する陶磁器を購入するとともに、鄭芝龍などを通じて華人海商に陶磁器を発注し、それらの大部分はバタヴィアやインドシナ半島に運ばれたことも明らかにしている。なお1630年代には、オランダ人が陶磁器を数回日本へ輸送したこともあるが、まもなく華人海商に圧倒され、1640年代になると日本への中国陶磁の輸出は華人海商にほぼ独占されるようになったという⁽¹⁸⁾。

また1609（万曆三十七）年にはオランダは平戸商館を設立し、日本貿易

にも本格的に参入した。加藤栄一は、主にオランダ船の積荷状を利用し、平戸商館における初期の貿易活動を検討し、当時の平戸商館は東インド会社の戦略拠点としての役割を担っていたと論じた⁽¹⁹⁾。これに対し、永積洋子は東インド会社総督ヤン・ピーテルスゾーン・クーンの書簡により、当時の平戸商館による武器弾薬や食料の輸出動向を分析し、加藤の戦略拠点説を批判した⁽²⁰⁾。さらに近年、行武和博は1616（万暦四十四）年以前における平戸商館における貿易活動を再検討し、1613（万暦四十一年）年以後、平戸商館は海外諸商館への軍需品や日本人傭兵の輸送を開始し、東インド会社の軍事補給地としての機能を担うようになり、その機能は1617（万暦四十五）年以降さらに強化されていったと論じている⁽²¹⁾。このように、初期平戸商館の果たした機能については議論が続けられているが、それらの論点は武器弾薬や食料の輸出問題に集中しており、主要商品の一つであった陶磁器についてはほとんど論及していない。平戸商館初期の貿易動向を把握するためには、陶磁貿易の状況を解明することも必要であろう。近年、平戸商館初期の遺跡から多数の中国陶磁が発掘され⁽²²⁾、それらの出土陶磁の生産地や年代の研究も進みつつある⁽²³⁾。オランダ東インド会社に関する文献史料とともに、これらの出土陶磁研究の成果も併用すれば、平戸商館初期の陶磁貿易について、より具体的な検討を進めることが可能であろう。

また、オランダ人が最初に拠点としたバンテンにおいて、沢山の陶磁器が発見されている。バンテンの陶磁貿易について、岩生成一は『東西洋考』に記録されているバンテンへの船舶数とオランダ人の書簡を併せ、「一般に2-4隻、最も多く6隻来航することがあった。彼たちは多数の良質並びに悪質の陶磁を齎した」と指摘した⁽²⁴⁾。1990年代、バンテンのスロリワン宮殿遺跡では大量の陶磁器の破片が出土した。坂井隆はこれらの実物資料を分析したが、1600～1630年代の30年間に関する論述は少ない⁽²⁵⁾。その後、スロリワン宮殿遺跡西側のプカンバル遺跡でも多くの陶磁器片が発見された。辛光燦は、坂井隆の研究を踏まえ、これらの破片を分析した⁽²⁶⁾。しかし、この研究で使われたのはプカンバル遺跡からの破片の一部に過ぎないので、出土した陶磁器の全体像を解明したとは言えない。そのため、バンテンの陶磁貿易について、より詳細な検討が期待されている。

以上、本稿では17世紀前期、オランダ東インド会社による陶磁貿易を先行研究にもとづき概観した。上述のように、17世紀初期のオランダ人の陶磁貿易については、まだ解明されていないことが多くある。本稿では主に

T・フォルカーの資料集に関する記録やオランダ台湾商館長官の書簡集（中国語翻訳版）などの資料を利用し、以下のことを検討したいと考えている。

1) バンテン・パタニでの陶磁貿易。特に、華人との陶磁貿易の実態をさらに解明する。2) 平戸商館初期の陶磁貿易。筆者は初期の陶磁貿易を考察するうえで、平戸商館初期の機能についての検討にさらなる資料を提供したいと考えている。3) 澎湖の陶磁貿易。「17世紀初頭のオランダの陶磁貿易と17世紀前期の大員陶磁貿易を結んだのは澎湖である」と盧泰康は指摘した。その上で、T・フォルカーの資料集やオランダ東インド総督とオランダ台湾長官の書簡集にも澎湖に関する記載があるので、オランダ人が澎湖を占領した時期の陶磁貿易をさらに検討する必要があると考えている。

二、オランダ人澎湖占領以前の陶磁貿易： 1600～1622

1604（万曆三十二）年、オランダ人は澎湖諸島を占拠し、そこを東アジアと東南アジアを結ぶ陶磁貿易の拠点とすることを図った。ただし明朝との対立により、1604年には澎湖諸島を放棄し、いったんは東アジア貿易から撤退を余儀なくされる。しかし1609年には、オランダ東インド会社は平戸に商館を設置することに成功し、その後は1624年に大員を占拠するまでは、バンテン・パタニ・平戸に商館を設置して、陶磁貿易を展開することになる。本節ではこの時期における陶磁貿易の状況について、パタニとバンテン、および平戸における貿易活動に焦点をあてて検討を加えることにしたい。

(1) パタニ・バンテンを拠点とする陶磁貿易

16世紀初頭から、ポルトガル船は中国陶磁をヨーロッパに輸出していたが、西欧市場に流入した中国陶磁の数量は限られていた。16世紀後半には、ポルトガル人はマカオにおいて相当量の中国陶磁を輸入し、ヨーロッパに供給するようになるが、なおヨーロッパ市場における大きな需要を満たすには不十分であった。1602年・1604年には、オランダ商館がポルトガル商船から略奪した大量の陶磁器がアムステルダムに搬入され、競売にかけられ、それを契機に、オランダでも中国陶磁の流通量が増加していく⁽²⁷⁾。

一方、1560年代末の海禁緩和以来、福建南部の漳州・泉州地域から東南

アジア各地に渡航する福建南部（閩南）の商人も急増していった。こうした閩南商人の貿易拠点の一つとなったのが、マレー半島東岸のパタニである⁽²⁸⁾。パタニに居留して貿易に従事していた海澄出身の李錦や潘秀などの商人は、福建近海の澎湖諸島が絶好の貿易拠点となると説いて、オランダ人をそこに誘引しようとした⁽²⁹⁾。海禁緩和後も、マカオのポルトガル人以外は、中国沿岸に来航して貿易を行うことは認められていなかったため、閩南商人は明朝当局の監視が及ばない澎湖諸島において、オランダ人と貿易を行おうとしたのである。しかし明朝当局はオランダ人の澎湖占拠を強く警戒し、彼らに退去を要求したため、オランダ人は澎湖諸島から退去せざるを得なかった。結局、オランダ人は中国近海に貿易拠点を確保することができず、バンテンやパタニなどに来航する華人海商に、中国陶磁の供給を依存せざるを得なかったのである。また陶磁器の種類や品質を選択する余地もさほどなく、入手しうる陶磁器の数量や品質も不安定で、価格も高かった。

1608（万暦三十六）年1月18日パタニ発の、オランダ商館員の覚書によれば、オランダ商館は華人商人に約10万件の上質陶磁器を発注しようとしているが、この年に実際にオランダに運ばれた中国陶磁器はわずか298件にすぎなかった⁽³⁰⁾。また1610（万暦三十八）年11月、オランダ東インド会社総督は、バンテンから本国の十七人会に書簡を送り、従来、華人商人から購入した中国陶磁は数量が少なく品質も低かったので、もっぱら上質陶磁を需要する本国にはほとんど送付していないと述べ、今後は十分な上質陶磁を供給しうる華人商人と連携して、本国に供給しうる商品を確保すべきだと伝えている⁽³¹⁾。このように、華人商人が供給する陶磁は品質や価格に問題があり、さらに華人商船が入港後すぐに価格をつり上げるといった問題もあり、それらを購入しても利益を得るのは難しかったという⁽³²⁾。

17世紀初期、パタニに来航する華人海商には漳州・泉州出身者が多く、彼らは漳州窯をはじめとして、東南沿海部で焼成された粗製陶磁器をパタニに輸出していた。ポルトガル人がマカオを通じて景德鎮などの上質陶磁を入手できたのに比べ⁽³³⁾、オランダ人がパタニで入手した陶磁の品質はどうしても低かった。またオランダ東インド会社の資金不足も、上質陶磁を十分に確保できない原因の一つであった。1600～1620年代には、オランダ東インド会社はモルッカ諸島の香料貿易をめぐる、ポルトガル人、スペイン人、イギリス人との衝突をくりかえしており⁽³⁴⁾、陶磁貿易に回せる資金

には限界があった。

このためオランダ人は、掛け買いや他の商品との物々交換も行って、華人商人から陶磁を購入していた。1616年、ヤン・クーンは十七人会に書簡を送り、十分な予算があれば、華人商人との取引を現金で行い上質陶磁を購入できると伝えている⁽³⁵⁾。しかし、十七人会は陶磁貿易に多額の資金を投入する余裕はなく、クーンの提案に応じるどころか、陶磁器の購入経費を従来年間10,000レアルから約3,000レアルまで減らしてしまい⁽³⁶⁾、このため1616年に東インド会社がオランダに輸出した陶磁器は減少をつづけている。ところが1620（万暦四十八）年5月6日には、本国の十七人会は総督クーンに書簡を送り、「長期間我々はいかなる陶磁器も受領しておらず、最近では陶磁器の需要が急増しているため、早急に大量の上質・中質級品を仕入れて送るように」と伝え、あわせて低質品も送付するように命じている⁽³⁷⁾。

総じて、1620年までのオランダ東インド会社の貿易活動の中心はモルッカ諸島の香料貿易にあり、陶磁貿易については、おもに華人商人がパタニヤバンテンにもたらす低質陶磁に依存せざるを得ず、その供給量や価格も不安定であった。この時点で中国沿岸に貿易拠点をもたないオランダ東インド会社は、マカオにおいてさまざまな品質の中国陶磁を安定的に入手しうるポルトガルに比べて、ヨーロッパ市場において十分な競争力を持つことはできなかつたのである。

(2) 平戸商館における中国陶磁の中継貿易

17世紀初頭のオランダ東インド会社は、ヨーロッパ市場に供給する上質な中国陶磁を安定的に確保することができなかつた。そこで東インド会社は、アジア間交易を通じて低質な中国陶磁を、アジア諸国の市場に供給し、その代価として銀や各種の商品を入手し、それによって十七人会が期待する上質陶磁を入手してヨーロッパ市場に供給する方針に転じた。このようにして、1605年からは多くの中国陶磁がコロマンデル海岸のマスリパタム商館へ輸出された。さらに1616年、オランダ東インド会社はインド西北のスラトに商館を設立すると、総督クーンはスラト商館にも中国陶磁を輸出することを図つた⁽³⁸⁾。本国の十七人会は、1616年に陶磁器の購入量も投資額も減らす方針を立てたが、クーン本人はなお陶磁貿易の推進を図っていた。1617年4月11日、クーンは十七人会に東インド会社の在庫陶磁をアジア市場に輸出することを提案し、「ご許可いただければ、バンタムにある陶

磁器の在庫品を利益率100%で販売できます。ご要望の良質な陶磁器を欧州へ供給できないという心配には及びません。十七人会の許可があれば、倉庫にある皿をアラビア半島やスラトに販売します」と提案している⁽³⁹⁾。

一方、1609年にはオランダ東インド会社は平戸に商館を設置して、日本における拠点を確保し、東アジア貿易への進出を図った。その後、東インド会社はパタニで購入した陶磁を平戸に輸出するようになる⁽⁴⁰⁾。ただしポルトガル人がマカオで上質陶磁を入手し、直接に長崎に輸出できたのに対し、オランダ人は華人商人がパタニやバンテンに供給する中国陶磁を再輸出するため、品質や数量も安定せず、輸送コストも高く、ポルトガル人と比べて不利な立場にあった。1614年、平戸商館員のジャック・スペックスがクーンに送った書簡でも、陶磁貿易の現況に対する懸念を表明している⁽⁴¹⁾。

このように平戸商館設立後も、オランダ人が日本市場に中国陶磁を安定的に供給することは困難であった。しかし総督クーンは日本市場から撤退しようとはせず、十七会に対し次のように提案している。「大量の資金を提供していただくよう切にお願いします。欧州に必要な貨物の購入だけではなく、この資金でポルトガル人やスペイン人の代わりに中国商品を購入し日本との貿易も行いたいと思います。日本で入手する銀によって、オランダに必要な商品を購入できれば、今後は（ヨーロッパから）こちらへ大量の銀を運んでもらわなくても大丈夫です」⁽⁴²⁾。彼は東インド会社が日本と中国などを結ぶアジア間貿易に参入し、日本銀を入手することによって、本国からの銀の送付を軽減できると考えたのである。

こうしてオランダ東インド会社は、大員に貿易拠点を確立するまで、平戸商館を中継地として、本国に供給する中国陶磁を購入することを図った。特に上質陶磁は平戸で調達し、そこからアジア各地に再輸出し、あるいはバタヴィアから本国に運んだのである。1610年にバタヴィアからオランダに運ばれた9,227件の中国陶磁は、すべて平戸商館で調達したものであった⁽⁴³⁾。また1613年にオランダ東インド会社の商船ヴィテ・レーウ号がセントヘレナ島沖で沈没したが、1978年にはこの沈没船から多くの万暦年間の景德鎮陶磁が引き揚げられている⁽⁴⁴⁾。一方、1987・1988年に平戸オランダ商館遺跡で行われた発掘調査では、17世紀初頭の景德鎮陶磁が多数採集されており、考古学的分析によれば、それらはヴィテ・レーウ号の引揚品と共通するものが多いことが判明している⁽⁴⁵⁾。

また1610年代には、オランダ人はマニラ近海で華人ジャンクを襲撃し、

上質陶磁を略奪して平戸に運び、さらにバタヴィアに転送されることもあった。1620年には、これらの上質陶磁が、他地域から運ばれた陶磁とともに、スラトとモカに輸出されている⁽⁴⁶⁾。平戸商館遺跡からは、景德鎮陶磁も出土しているが、そのなかにも長崎での購入品のほか、マニラ近海における華人ジャンクからの略奪品が含まれていた可能性がある。上述のヴィテ・レーウ号が積載していた景德鎮陶磁にも、平戸商館が調達した購入品や略奪品が含まれていたであろう。オランダが大員を占領する以前は、平戸商館は上質陶磁を調達する中継拠点としての役割も果たしていたと思われる。

さらに平戸商館ではパタニから輸入した粗製陶磁の一部を、日本に在住するオランダの個人商人に売却することもあった。1600年にオランダ船リーフデ号が豊後に漂着した後⁽⁴⁷⁾、その乗員の一部は日本に滞在し、個人商人として平戸オランダ商館と取引を行っていた。たとえば朱印船貿易家として知られるヤン・ヨーステン・ローデステインは、1614年5月に平戸商館に2400件あまりの粗製陶磁を注文している⁽⁴⁸⁾。ただし、これらの陶磁の最終的な売却先は、現時点では確認することができない。

三、オランダ人澎湖占領後の陶磁貿易： 1622～1624年

1622年、オランダ人は澎湖諸島を占拠し、そこを拠点として中国貿易に本格的に進出することを図った。その後2年間にわたり、澎湖のオランダ人と明朝当局との間で、交渉と交戦がくりかえされたが、結局1624年8月にいたり、オランダ人は澎湖を対中貿易拠点とすることを断念し、撤退することになる⁽⁴⁹⁾。この間にオランダ人が行った貿易活動や略奪行為の実態について、林偉盛は澎湖の司令官であったコルネリス・レイエルセンの日記を主な史料として論じているが、陶磁貿易に関する論及は少ない⁽⁵⁰⁾。これに対し、T・フォルカーの史料集には、1620～1622年におけるオランダ東インド会社の陶磁貿易に関する記事も残されており、また、大員のオランダ商館長官がバタヴィアの東インド会社総督に送った書簡にも、澎湖でのオランダ人の貿易活動に関する記録が含まれている。本節ではこれらの史料により、澎湖占領期におけるオランダ東インド会社の陶磁貿易の一端を明らかにしてみたい。

(1) 対中貿易拠点としての澎湖諸島

1622年に澎湖諸島を占拠したオランダ人は、そこをポルトガル人にとってのマカオのように、中国産品を調達する貿易拠点とすることを期待していた。しかしマカオのポルトガル人とは異なり、澎湖のオランダ人は明朝当局との間に安定的な関係を築くことができず、また居住環境や貿易条件も劣っていた。特に深刻だったのは、貿易拠点を維持するための補給不足の問題である。1622年～1624年に、澎湖の司令官レイエルセンはバタヴィアの総督クーンにしばしば書簡を送り、澎湖の劣悪な環境や補給不足を訴えている。彼は1623（天啓三）年3月の総督宛書簡で、「澎湖は非常に健康に良くない所だ」と述べ、病人や使者が多発していると報告している⁽⁵¹⁾。当時、彼自身も澎湖の環境に大変悩まされたさらに明朝との交戦により負傷者も増加し、軍糧の不足も深刻化していった⁽⁵²⁾。

またオランダ人は、日本から南シナ海域に南下する貿易船が、澎湖諸島に寄港し、中国産品の代価となる商品を供給することも期待していた。しかし実際には、澎湖は日本と中国との中継貿易拠点としては不適當であった。レイエルセンは1624年1月の当時のオランダ東アジア会社の総督のカルペンティエル宛書簡において、日本から南下する貿易船は、船体の補修などの必要がなければ、澎湖を経由せずに南シナ海域に直航してしまい、これらの貿易船から商品を調達することは難しいと述べている⁽⁵³⁾。

さらに明朝当局はオランダ人の澎湖占拠を受けて、福建沿海の海禁をふたたび強化した⁽⁵⁴⁾。オランダ人も明朝当局との数次の交戦を経て、軍事的に明朝に対抗して貿易を強行することは困難であると認識せざるを得なかった⁽⁵⁵⁾。また、且つ、数度の戦争を経て、中国人の中で彼らの評判は極めて悪かった。1623年9月のレイエルセンのクーン宛書簡では、澎湖において華人海商と交易を推進するだけの資金力もなく、華人からの信頼も勝ち得ていないと率直に述べている⁽⁵⁶⁾。1624年1月にも、レイエルセンは総督カルペンティエルに書簡を送り、澎湖に要塞を建設するよりも、対岸の大員を貿易拠点とするべきであったと述べ、福州巡撫はすべての華人商人に対し、いかなる場所でもオランダ人との貿易を禁止することを通達し、強大な軍事力を背景しないかぎり、澎湖において貿易を推進することは不可能であると報告した⁽⁵⁷⁾。

こうした状況下では、澎湖諸島における中国陶磁の十分な調達も困難で

あり、華人海商による陶磁の密輸を受動的に待つしかなかった。このためオランダ人は、ルソン近海で中国に渡航する華人やスペイン人の商船を襲撃し、陶磁を含む商品を略奪することを図った。たとえば1620年ごろ、日本からバタヴィアへ輸送した3,000件あまりの上質陶磁や、1624年1月ごろ、バタヴィアからアムステルダムへ輸送した約10,000件の中質の陶磁皿は、こうしてルソン近海で略奪したものであった⁽⁵⁸⁾。しかし、こうした略奪による商品調達には限界があり、オランダ東インド会社は、華人海商が東南アジア各地の港市にもたらず陶磁を購入し、本国における陶磁の多大な需要に応じようとした。1622年には、本国の十七人会が総督クーンに対し、67,250件の陶磁を発注しており、それに対し、1623年にはバタヴィアからアムステルダムに向けて、63,931件の陶磁が輸送されている。その船荷証券の記載によれば、それらの陶磁の調達地の内訳は、パタニから51,455件、ソクララから6,586件、そしてバタヴィアから5,890件であった⁽⁵⁹⁾。

なお1622～1624年の澎湖諸島の遺跡で出土した陶磁には、東南アジア産品も含まれるが、中国産品が圧倒的に多い。その内訳は、景德鎮窯が89枚、漳州窯が193枚、徳化窯が4枚である⁽⁶⁰⁾。景德鎮に比べて粗製の漳州窯陶磁が多くを占めており、それらは主として閩南商人により対岸の漳州から密輸されたものであろう⁽⁶¹⁾。景德鎮産の陶磁のなかには、密輸のほか略奪を通じて獲得したものも多かったであろう。ただしオランダ東インド会社の陶磁貿易に関する記録には、1622～1624年の澎湖占領期に、日本やバタヴィアに陶磁を運んだ記録は確認することはできない。この時期に澎湖に搬入された陶磁のなかには、現地で備蓄され、その後大員の商館などに移されたものも多かったのではないかと思われる。

(2) オランダの大員進出と李旦の陶磁貿易仲介

オランダ人は1622～1624年に澎湖を占拠して、中国本土との貿易を試みるとともに、台湾本島の大員においても華人海商との交易を行うことを図った。そこでオランダ人に協力したのが、当時平戸に居留し、福建沿海や台湾から東南アジアにいたる地域で貿易をおこなっていた、泉州出身の海商李旦であった⁽⁶²⁾。李旦は福建沿海で生糸・絹・陶磁などの中国産品を調達し、それをオランダ人に供給したのである。一方、明朝当局はオランダ人が李旦を通じて、倭寇の勢力と結託することを危惧し、李旦に対し、オランダ人が澎湖から撤退するように説得することを求めた⁽⁶³⁾。この結果、李

且の調停を受け、1624年8月にオランダ人は澎湖を放棄して大員に拠点を移すことになる⁽⁶⁴⁾。1624年9月、オランダ人が大員で城堡を構築し、商館を設立し、1627(天啓七)年にこの城堡をゼーランディア城に改称した⁽⁶⁵⁾。

オランダ人は大員において、おもに李且を通じて福建沿岸から陶磁を含む中国商品を輸入し、それを日本や東南アジア各地に中継輸出することを図った。1624年8月には、レイエルセンに代わってオランダ東インド会社の大員長官となったマーチヌス・ソングが、貿易パートナーである「中国甲必丹」、すなわち李且に多くの陶磁サンプルを届けていた⁽⁶⁶⁾。ソングは同年11月に総督カルベンティエルに送った書簡でも、「中国甲必丹」を通じて陶磁を含む中国商品を大量に注文したと報告している⁽⁶⁷⁾。

ところが翌1625(天啓五)年8月には李且が急逝してしまい、オランダ人は中国貿易最大のパートナーを失ってしまった。当時の台湾海峡では、多くの海商・海寇勢力が貿易利権を争奪して競合しており⁽⁶⁸⁾、大員のオランダ商館も彼らと協力して福建沿岸との交易関係を維持しようとしたが、1624～1630年には総じて台湾海峡の情勢は不安定で、安定した貿易関係が形成されるにはいたらず、大員に供給される陶磁の数量も十分ではなかった⁽⁶⁹⁾。こうした海商・海寇勢力の角逐のなかで頭角を現し、対抗勢力を排除または吸収して、福建沿岸の海上貿易を掌握していったのが、泉州安平港・アモイを拠点とする鄭芝龍の海上勢力である⁽⁷⁰⁾。1633(崇禎六)年、オランダ人はふたたび福建沿岸に進出して貿易拠点を確保しようとするが、料羅湾の海戦で鄭芝龍に大敗し、大員に撤退して福建海商による中国商品の供給を待つしかなかった⁽⁷¹⁾。しかしその後、鄭芝龍とオランダ東インド会社は関係を修復し、協力して貿易を進めることになり、鄭芝龍傘下の多数の華人海商が大員に来航し、中国商品を供給するようになる⁽⁷²⁾。これにともない、1634(崇禎七)年以降は大員に輸入された陶磁の数量も急増している⁽⁷³⁾。ただしその後も、福建から太員への当時の供給は、鄭芝龍勢力を中心とした華人海商が主導権をにぎっており、オランダ東インド会社は陶磁の種類や品質の選択において一定の主体性も持っていたものの、全体としては福建商人による陶磁供給を依存する受動的な立場にとどまらざるを得なかったのである。

四、おわりに

以上、本稿では1600～1630年における、オランダ東インド会社の中国陶磁貿易に関して、関係文書・書簡の英訳・中国語訳に基づいてオランダ人の貿易記録の英訳版と東インド総督の書簡集の中国語訳版に基づいて検討を試みた。まず1600～1622年には、オランダ人はバンテンを本拠として、パタニや平戸の商館を結んで陶磁貿易に従事した。当時のオランダ人はパタニやバンテンにおいて、華人海商がもたらす大量の陶磁を購入したが、それらの大部分は福建南部の漳州窯をはじめとする粗製陶磁であり、マカオのポルトガル人とはことなり、景德鎮などの高級陶磁を安定的に確保することはできず、パタニで調達した中国陶磁を日本市場に供給する計画が実現しなかった。一方、平戸オランダ商館にはマニラ近海での略奪品や、長崎での購入品などの高級陶磁が運ばれ、陶磁貿易の中継地としても機能していた。

ついで1622～1624年には、オランダ東インド会社は澎湖諸島を中国貿易の中継拠点としようとしたが、明朝当局との対立や環境条件の劣悪さなどによって成功せず、福建から澎湖に運ばれた陶磁も依然として漳州窯が多くを占めていた。結局、オランダは福建海商のリーダーであった李旦の仲介により澎湖を放棄して大員に撤退し、おもに李旦を通じて陶磁を含む中国商品を調達した。しかし李旦の急逝後は、台湾海峡では多くの海寇・海商勢力が角逐し、オランダ東インド会社がゼーランディア城を拠点に、鄭芝龍と協力して陶磁などの中国商品を安定的に確保できるようになるのは、1630年代を待たざるを得なかったのである。

註

- (1) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, Leiden: E. J. Brill, 1954. なお『陶説』312号～370号（1979～1984年）には、同書収録の史料の和訳が連載されている。ただし本稿で同書所収の史料を引用する際には、英文から直接に訳出した。
- (2) 黄盛璋「明代後期船引之東南亜貿易港及其相関的中国商船、商僑諸研究」（『中国歴史地理論叢』3輯、1993年）。岩生成一「下港の支那町について」（『東洋学

- 報』31卷4号、1948年)など。
- (3) 黄薇、黄清華「上川島与中葡早期貿易」(『陶磁下西洋——早期中葡貿易中的外銷瓷』香港城市大学中国文化中心、2010年)。王冠宇「葡萄牙人東來初期的海上交通与陶磁貿易」(『海交史研究』2016年第2期)。馬錦強『澳門出土明代青花磁器研究』(社会科学出版社、2014年)。
 - (4) 宮田繪津子『マニラ・ガレオン貿易——陶磁器の太平洋貿易圏』(慶應義塾大学出版会、2017年)。李旻「早期全球貿易与福建陶磁考古——太平洋航線上的漳州窯陶磁」(『考古學視野中的閩商』中華書局、2010年)。
 - (5) M. Beurdeley, *Porcelain of the East India Companies*, London: Barrie and Rockliff, 1962, pp.89-95.
 - (6) T. Volker, *Porcelain and the Dutch East Indian Company*.
 - (7) 錢江「十七至十八世紀中国与荷蘭的陶磁貿易」(『南洋問題研究』1989年1期)。
 - (8) 郭輝訳注『巴達維亞城日記』全三冊(台湾省文献委員会、1970年)
 - (9) 江樹生訳注『熱蘭遮城日誌』全四冊(台南市政府、1999年~2011年)
 - (10) Leonard Blussé, “The Dutch Occupation of the Pescadores”, *Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan*. Vol.18,1973. 江樹生「梅花鹿与台湾早期歷史關係之研究」(『梅花鹿復育之研究七十三年度報告』墾丁國家公園管理处、1985年)。曹永和「澎湖之紅毛城与天啓明城」(『台湾早期歷史研究統集』聯經出版公司、2000年)。
 - (11) 陳小沖「1622-1624年の澎湖危機——貿易、戦争与談判」(『思与言』31卷4号、1993年)。李金明「十七世紀初荷蘭在澎湖、台灣的貿易」(『台湾研究集刊』1999年第2期)
 - (12) 林偉盛「荷蘭人入拠澎湖始末(1622-1624)」(『国立政治大学歴史学報』16期、1999年) 2~3頁。
 - (13) 林偉盛前掲「荷蘭人入拠澎湖始末(1622-1624)」33~37頁。
 - (14) 中国古代外銷陶瓷研究会『中国古代外銷陶瓷研究資料』1輯(中国古代外銷陶瓷研究会、1981年)。Sumarah Adhyatman, *Zhangzhou (Swatow) Ceramic*, Jakarta: Ceramic Society of Indonesia, 1999. Rita C. Tan, *Zhangzhou Ware found in the Philippines*, Philippines: Yuchengco Museum, 2007.
 - (15) 盧泰康『十七世紀台湾外来陶磁研究——透過陶磁探索明末清初的台湾』(国立成功大学博士論文、2007年) 39~84頁。
 - (16) 盧泰康「澎湖鳳櫃尾荷拋時期陶磁遺物之考証」(『故宮文物月刊』19卷5期、2001年)。
 - (17) 盧泰康前掲『十七世紀台湾外来陶磁研究』39~84頁。なお最近では、顏廷仔・

劉益昌「澎湖風櫃尾荷蘭城堡考古学調査新発見成果」(『砗磲石』84期、2016年)が、風櫃尾遺跡において新たに採集された17世紀の中国陶磁のデータを提示しているが、陶磁貿易の実態についての議論は行っていない。

- (18) 盧泰康前掲『十七世紀台湾外来陶磁研究』85～127頁。
- (19) 加藤栄一『幕藩制国家の形成と外国貿易』(校倉書房、1993年)67～94頁。
- (20) 永積洋子「平戸商館はオランダの戦略拠点か」(中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館、1997年)187～209頁。
- (21) 行武和博「家康政権の对外政策とオランダ船貿易」(『東京大学資料編纂所研究紀要』17号、2007年)102～103頁。
- (22) 『平戸和蘭商館遺跡の発掘Ⅲ』(平戸市教育委員会、1992年)33頁。
- (23) 『呉州赤絵・呉州染付・餅花手』(愛知県陶磁資料館、1996年)33頁。
- (24) 岩生成一前掲「下港の支那町について」37頁。
- (25) 坂井隆『港市国家バンテンと陶磁貿易』(同成社、2002年)。
- (26) 辛光燦「西爪哇下万丹遺跡発現的中国陶磁初探」(『故宫博物院院刊』2013年第6期)。
- (27) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, pp.21-25.
- (28) 16-17世紀のパタニにおける海外貿易については、Francis R. Bradley, “Piracy, Smuggling, and Trade in the Rise of Patani, 1490-1600,” *Journal of the Siam Society*, Vol.96, 2009, ピヤダー・シヨラオン「王国時代のパタニ——琉球との交流から女王の支配時期まで——」(鈴木規之・稲村務編『越境するタイ・ラオス・カンボジア・琉球』彩流社、2011年)参照。
- (29) 張燮『東西洋考』巻六「紅毛番」。
- (30) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.23.
- (31) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.24.
- (32) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.24.
- (33) 劉朝輝「澳門発見的克拉克瓷」(『陶磁下西洋——早期中葡貿易中の外銷瓷』香港城市大学中国文化中心、2010年)27頁。馬錦強前掲『澳門出土明代青花磁器研究』262～266頁。
- (34) 孫澄「早期西方殖民主義者在東南亞の争奪」(『雲南師範大学学报(哲社版)』1986年3期)27～29頁。永積昭『オランダ東インド会社』(講談社、2000年)72～111頁。
- (35) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.26.
- (36) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, pp.26-28.
- (37) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.30.

- (38) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.66.
- (39) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.28.
- (40) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.117.
- (41) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.117.
- (42) ヤン・クーンなどから十七人会宛の報告書、バタヴィア、1622年9月6日(程紹剛『荷蘭人在福爾摩莎』聯經出版公司、2000年、12頁)。
- (43) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.118.
- (44) C. L. van der Pijl-Ketel: *The Ceramic load of the 'Witte Leeuw' (1613)*, Amsterdam : Rijksmuseum Amsterdam 1982. pp.46-143.
- (45) 『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅲ 鄭成功居住跡の発掘』(平戸市教育委員会、1992年) 33頁。
- (46) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.30.
- (47) 森良和「メルヒオール・ファン・サントフォールト——日本で生きることを選んだリーフデ号船員の生涯」(『論叢：玉川大学教育学部紀要』2018年) 81頁。
- (48) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.118
- (49) 鄭永常『来自海洋の挑戦——明代海貿政策演變研究』(稻郷出版社、2004年) 297頁。
- (50) 林偉盛前掲「荷蘭人入拠澎湖始末(1622-1624)」。
- (51) 1623年3月5日付、レイエルセンのクーン宛書簡、(江樹生『荷蘭聯合東印度公司台灣長官致巴達維亞總督書信集』国立台湾歴史博物館・国史館台湾文獻館、2010年、45頁)。
- (52) 1622年11月20日付、レイエルセンのクーン宛書簡、(江樹生前掲『荷蘭聯合東印度公司台灣長官致巴達維亞總督書信集』25-31頁)。
- (53) 1624年1月25日付、レイエルセンのカルペンティエル宛書簡、(江樹生前掲『荷蘭聯合東印度公司台灣長官致巴達維亞總督書信集』93頁)。
- (54) 崇禎『海澄縣志』卷六、秩官志、餉官、張應斗。
- (55) 1624年11月5日付、ソククのカルペンティエル宛書簡、(江樹生前掲『荷蘭聯合東印度公司台灣長官致巴達維亞總督書信集』133頁)。
- (56) 1623年9月26日付、レイエルセンのクーン宛書簡、(江樹生前掲『荷蘭聯合東印度公司台灣長官致巴達維亞總督書信集』70頁)。
- (57) 1624年1月25日付、レイエルセンのカルペンティエル宛書簡、(江樹生前掲『荷蘭聯合東印度公司台灣長官致巴達維亞總督書信集』92頁)。
- (58) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.34.
- (59) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.31.

- (60) 盧泰康前掲『十七世紀台湾外来陶磁研究』68～69頁。
- (61) 盧泰康前掲『十七世紀台湾外来陶磁研究』71頁。
- (62) 岩生成一「明末日本僑寓支那人甲必丹李旦考」（『東洋学報』23巻3号、1936年）404～405頁。
- (63) 陳思「論1622－1625年間福建大海商李旦与荷蘭殖民者的關係」（『閩台文化研究』2016年第2期）20頁。
- (64) 鄭永常前掲『来自海洋的挑戰——明代海貿政策演變研究』297頁。
- (65) 鄭永常前掲『来自海洋的挑戰——明代海貿政策演變研究』301頁。
- (66) T. Volker, *Porcelain and The Dutch East Indian Company*, p.34.
- (67) 1624年11月5日付、ソククのカルペンティエル宛書簡、（江樹生前掲『荷蘭聯合東印度公司台湾長官致巴達維亞總督書信集』136頁）
- (68) 黃俊凌「17世紀上半葉台湾海峡貿易主導權問題薪探——以荷蘭侵占台湾初期的轉口貿易為中心」（『世界歴史』2016年第5期）101頁。白井康太「十七世紀前半、福建沿海の海商と海寇——漳州・泉州地域を中心として」（『九州大学東洋史論集』38巻、2010年）
- (69) 盧泰康前掲『十七世紀台湾外来陶磁研究』86頁。
- (70) 林仁川『明末清初私人海上貿易』（華東師範大学出版社、1987年）157～158頁。永積洋子「由荷蘭史料看十七世紀的台湾貿易」（『中国海洋發展史論文集』7輯、中央研究院中山人文社会科学研究所、1999年）39頁。
- (71) 盧泰康前掲『十七世紀台湾外来陶磁研究』88頁。林偉盛「1633年の料羅湾海戦——鄭芝龍与荷蘭人之戦」（『台湾風物』45巻4期、1995年）。甘穎軒「中国海盜与料羅湾海戦」（『海洋史研究』9輯、社会科学文献出版社、2016年）。
- (72) 黃俊凌前掲「17世紀上半葉台湾海峡貿易主導權問題薪探——以荷蘭侵占台湾初期的轉口貿易為中心」104頁。
- (73) 盧泰康前掲『十七世紀台湾外来陶磁研究』89頁。

[附記] 本稿印刷中に、加藤栄一氏の論考「オランダ船と陶磁器貿易の変遷——十七世紀初頭から明清兵革まで——」（『出光美術館館報』158、2012年）の存在に気がついていた。本稿の内容と関連する問題についても論及されているが、今回は参照することができなかった。